

# 令和6/7年度各種委員会・支部活動等報告 (2026年5月)

常任理事 担当者	委員会名	委員長	令和6/7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告(令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	活動総括(令和7年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
小田	理事会・拡大常任理事会	小田 義直	理事長として特に1.リサーチマインドを持つ病理医育成、2.国際志向性に富んだ病理医育成、3.病理専門医数の増大の三点に重点を置き、その実現に向け理事会・常任理事会を運営してゆく。病理専門医数の増大に関しては、全国的な剖検数の減少と、専攻医登録者数の伸び悩みがリンクしているようなので、その対策を早急に講じてゆく。ダイバーシティを考慮しサステイナブルな学会活動を維持するため、各種委員会やワーキンググループに積極的に女性や若手を登用して運営してゆく。	減少傾向にあった病理専攻医登録者数が大幅に増えた。その要因を解析する必要があり、剖検数減少に対しては内科学会、医療安全調査機構と連絡会議を行い協議した。2025年春の総会で内科学会および機構を交えた病理解剖に関するシンポジウムを行う予定である。若手病理医の活動を活性化するためにUnder 40 WGを設置し学術集会所での企画を行う予定である。若手が多く参加できるように各種委員会は学術集会所の対面では随時オンラインでも開催可能なようにした。国際交流については英国、ドイツ、ヨーロッパ、中国との交流事業の時期、費用分担などについて体系的に整理を行い円滑に進むようにした。	増加した病理専攻医登録者数が減少に転じる見通しのため、今後は根本的な要因を解析する。要因の一つと考えられる病理解剖数減少に対しては内科学会、医療安全調査機構と引き続き連絡会議により対策を協議し、内科学会と合同で剖検許諾に関するアンケートを行い、内容を解析中である。2026年春の総会で病理解剖に関するシンポジウムを企画した。ゲノム病理診断の保険収載を目指して厚労省研究班を立ち上げ、ガイドランスを作成中である。令和8年度の保険収載は見送られたが、令和10年度を目指して引き続き調査と研究を継続してゆく。英国、ドイツ、ヨーロッパ病理学会との交流事業を円滑に行った。
大橋	選挙管理委員会	大橋 健一		偶数年設置	理事、監事の選挙を円滑に進めることができた。選挙人名簿が会員システムとリンクしていたが、本来選挙権がなくなっている会員が名簿に含まれている不具合が認められた。現在進められている会員システムの更新によって、次回選挙時には問題が解消されていることが望まれる。
豊國	倫理委員会	谷田部 恭	・日本医学会による「学術集会所への演題応募における倫理的手続きに関する指針」の改訂に伴い、2024年度以降の病理学会学術集会所の演題登録についての基準を作成する。 ・剖検症例の研究使用についての病理学会指針を策定する。 ・学術研究に際しての個人情報保護法の問題については倫理指針と関連しているが、大学・国立研究開発法人以外では異なることから、それ以外に所属する会員へ情報発信していきたい。	・日本医学会による「学術集会所への演題応募における倫理的手続きに関する指針」の改訂に伴い、病理学会としての演題登録指針への改訂を目指して準備を始めた。 ・「患者に由来する病理検体の保管・管理・利用に関する日本病理学会倫理委員会の見解」の見直しについてメール、委員会を開催し、ドラフトを作成している。	・会員から寄せられる倫理的問題・疑問についての対応を行った。 ・「患者に由来する病理検体の保管・管理・利用に関する日本病理学会倫理委員会の見解」の見直しについてドラフトを策定した。次期委員会では、このドラフトを理事会の承認などを経て、会員からの意見聴取や他学会からの意見聴取等の手続きを経て公開を行っていただきたい。
大橋	COI委員会	大森 泰文	COIや倫理に関する問題は、その多くが手続き上の形式的なミスによるものであるが、しばしば関係者に重大な結果をもたらされる。会員の研究成果やその他の業績が些細な配慮不足でその価値が棄損されないよう、注意喚起をしていく。	「固形癌HER2病理診断ガイドランス改訂第3版」策定WG委員のCOI申告書を精査し、理事長に対して回答を行った。 COI定時申告を課す対象となる役員および各種委員、計138名から提出された2024年度COI申告書の内容を精査し、受理した。 「病理診断支援AIの手引き」策定WG委員のCOI申告書を精査し、現在申告書の作成作業中である。	「固形癌HER2病理診断ガイドランス改訂第3版」策定WG委員、「病理診断支援AIの手引き」策定WG委員、「病理診断を目的としたゲノム検査(パソジカルシーケンス)の実施に対する検査体制の整備と、遺伝子プロファイルを用いた病理遺伝子診断の指針の策定」研究参加者、「子宮頸部上皮内腫瘍p16免疫染色ガイドランス」策定WG委員のCOI申告書、日本医学会「診療ガイドランス策定参加資格基準ガイドランス 2023」に則って精査し、理事長に対して回答を行った。 COI定時申告を課す対象となる役員および各種委員から提出された2024/2025年度COI申告書の内容を精査し、受理した。
豊國	個人情報及び匿名加工情報取扱い委員会 活動休止予定	谷田部 恭	・JIP-AID事業が終了し、その後のデータ利活用公開の際に確認も完了したため、R6年を最終年度として委員会の終了を検討する。	定款の変更を避けるため、休止として推移を見守ることとした。	活動休止
豊國	学術評議員資格審査委員会	伊藤 智雄	委員の連携により、学術評議員内規に基づいた公正で適切な審査を進めてゆく。合わせて、問題点などがあれば適宜改善に努めてゆく。	本年も厳格な審査を行い、学術評議員43名を資格有りとして認定した。来年度に向けても厳格な審査を行ってゆく。	厳格な審査を行い、学術評議員申請者 73名、可 72名、否 1名(病理研究歴に育休期間が含まれていたため)となった。
	功労会員・名誉会員資格審査委員会	古川 徹	規定に従い名誉会員の審査ならびに功労会員の候補者の資格審査を行い、適切な候補者を推薦する。	名誉会員内規・申し合わせ事項の改訂を理事会に提案した。規定に沿って功労会員、名誉会員の推薦を行った。	規定に沿って功労会員、名誉会員の推薦を行った。
	企画委員会	大橋 健一	学会の発展に資する総務的な種々の事項を立案・検討する。学会の将来構想、機構改革、その他の委員会に属さない重要事項につき検討する。理事会、委員会活動の活性化のため、女性、若手の登用等の対策を積極的に進める。会員、専攻医増加のための対策を検討する。剖検数減少に対する対策を検討する。	若手病理医の研究活動の活性化のため、Under 40 WGを立ち上げた(榎本委員長)。北海道での総会時からUnder 40 WG企画のシンポジウム、ワークショップを開けるように企画を進めることになった。会員数増加、専攻医増加のための対策が話し合われた。内科学会、医療安全調査機構と話し合いが行われた。会員システムの改修が進められた。学術評議員委員会・専門医部会のあり方について議論され、総会時の合同開催が行われることになった。	若手病理医の研究活動の活性化のため、Under 40 WG(榎本委員長)が立ち上げられ、北海道での総会時からシンポジウム、ワークショップが企画、運営される。会員数増加、専攻医増加のための対策が話し合われた。剖検数増加のため、内科学会、医療安全調査機構と話し合いが行われた。会員システムの改修が進められている。学術評議員委員会・専門医部会のあり方について議論され、総会時に合同開催されることになった。
	DEI推進委員会	福田 京子	本委員会では女性のみならず、地域、職場、家庭環境など、様々な背景を持つ本会員の多様性を認め、本会の事業に自発的に参加しやすいよう一人一人に適した環境を整備するとともに、誰もが本会の発展のために活躍出来るような機会を提供することを目的とする。本委員会はDEI推進のための課題の把握とその対策に関する業務を行う予定である。そのために本会事業への参加の推進及び必要な啓発活動、本会の事業に関する課題の把握及びその対策に関する業務を行っていきたい。	前期に実施した病理医の働き方に関するアンケート結果の解析を進め、会員の様々な働き方の実態を明らかにした。また、多岐にわたる多くの意見の集計作業も終了し、4月の総会において一部をポスター発表する予定である。	前期に実施した病理医の働き方に関するアンケート結果の解析を終え、会員の様々な働き方の実態を明らかにした。また、多岐にわたる多くの意見の集計作業も終了し、2025年4月の総会においてポスター発表を行った。R8年度はアンケート結果の公開に向けてその方法などを検討する。また、4月の学術総会におけるワークショップを企画し、病理医の様々な働き方について、事例の紹介とともにディスカッションを行う予定である。
大橋	登録衛生検査所等における「病理診断」に関する検討委員会	大橋 健一	登録衛生検査所等における病理診断に関する諸問題を整理し、対策を検討する。日衛協代表との交流、意見交換を進める。	非公式に日衛協との話し合い、交流が進められた。病理検査報告書の取り扱い、名称についてアンケートを依頼し、実行された。	非公式に日衛協との話し合い、交流が進められたが、正式な交流になるように現在調整中である。病理検査報告書の取り扱い、名称についてアンケートが実行され、不適切な記載をしないように周知が行われた。
	会員システム検討WG	中黒 匡人	現在の会員システムの問題点を検討し、新システムに必要な機能を検討していく。	業者選定は終了し、現在新会員システムの作りこみを開始している。	新会員システムへの移行は完了した。当面未実装となっている部分につき引き続き対応する。
	支部委員会	久岡 正典	7支部における今日の活動状況について情報を共有し、その中で有意義な取り組みや参考となる運営方法などを、各支部で活用を図るべく提供すると共に、課題が存在する場合にはその解決策を探る。各支部での病理医のリクルートや会員の生涯教育等に資する活動を引き続き支援していく。	委員会を2回開催し、7支部の活動状況の確認と問題点を含む意見交換を行った。また、各支部の会計の状況や事務局の業務負担、支部専用ホームページの運営、相談窓口設置への対応状況等をアンケート調査により把握し、情報共有した。	毎年委員会を2回開催し、7支部の活動状況の報告と種々の意見交換を行った。また、支部への補助金支給の方針を報告承認し、支部の意見状況やホームページを含む運営についてのアンケート調査を行って現状の課題等を整理した。
	財務委員会	大橋 健一	学会の財務基盤の安定性が維持されるように努める。財務の視点から、学会の発展のための課題、将来構想を検討し、適切な支出をする。会員システムの改変などシステム関係に大きな出費が今後予想されるが、適切に対処する。	2023年度の正味財産増加額は35,354,441円と前年度に比べて26,836,456円の増加となった。正味財産期末残高も337,205,695円となって財務的に健全な結果となった。2025年度の予算案では2,244,023円のプラス予算を見込んでいる。	2024年度の経常利益は前年度より10,683,657円減少して25,271,086円となった。正味財産期末残高は362,476,781円と2023年度に引き続き、3億円を大幅に上回る結果となった。2026年度の予算に則して、新会員システムのソフトウェア償却費として減価償却費が550万円ほど新たに計上されるため、結果として約100万円のマイナス予算となったが、新会員システム費の2,750万円については2024年度までの蓄えより支払うこととなるので、財政的には問題ない。
都築	国際交流委員会	都築 豊徳	現在行っている国際交流事業の継続を行う。更には人的なつながりを深くする努力を行う。 若手病理医が留学を目指すための手助けとなるような行事を開催する。	英国病理学会、ドイツ病理学会、欧州病理学会とのMoUを締結した。中華病理学会とのMoU締結に向けて準備を進めている。フレンツェ大学病院訪問を行った。病理学会秋期大会でモーニングセミナーを開催し、留学希望者への助言の場を提供した。	欧州病理学会との合同シンポジウムを開催した。英国病理学会へsenior1名、junior2名の派遣を行った。ドイツ病理学会からsenior1名が派遣され、総会にて発表を行った。中華病理学会とのMoU締結に向けて準備を進めている。ウーン医科大学及びグラーツ大学病院訪問を行った。病理学会秋期大会でモーニングセミナーを開催し、留学希望者への助言の場を提供した。
田中	学術委員会	田中 伸哉	1)学術委員会の重要な任務の1つは、各学会賞の決定である。日本病理学賞、診断病理学賞、学術研究賞、症例研究賞について各賞の意義を再確認しながら、円滑に選考を進め、受賞者および学会が更に発展するように役割を果たしたい。2)総会、秋期特別総会のあり方も学会の学術活動のコアである。特に英語化、国際化については他学会の様子を踏まえながら病理学会としてのあるべき姿を模索していきたい。	(1)総会、秋期特別総会における学術プログラムとスポンサーセミナーの関係についての検討がなされ、日本病理学賞・病理診断学賞・学術研究賞、症例研究賞の受賞講演はプレナリーとして実施することが確認され、それ以外の部分については、会長に一任することが確認された。(2)学術奨励賞(応募12件)、学術研究賞(応募14件)、症例研究賞(応募4件)については受賞者が厳正な審査の上決定された。	令和7年秋には、日本病理学賞・診断病理学賞の選考委員会が対面で開催され、日本病理学賞が0名(応募13名)、診断病理学賞が2名(応募6名)決定された。また、学術奨励賞受賞者8名(応募10名)、学術研究賞3名(応募13名)、症例研究賞2名(応募4名)について厳正な審査の上決定された。尚今回奨励賞については個々のレベルが高く8割の受賞となった旨、理事会・社員総会で説明する予定。
牛久	編集委員会	牛久 哲男	学会刊行物の編集・発信の安定した運営に努める。会員の診療、研究活動に役立つ情報を提供し、随時アップデートを行う。	学会刊行物に関する運営を継続。各刊行物(Pathology International、診断病理、専門医部会報、剖検情報)については各担当委員を参照。	Pathology InternationalはIF3、4と上昇、診断病理のオンライン化、オープンジャーナル化を完了し、剖検情報66号を発売。
	PI刊行委員会	田中 伸哉	PINの円滑な査読を行う。インバートファクターが上がる様に尽力していきたい。2023年のIFは2.2であり、前年から0.079増加とほぼ横ばいであった。順位はPathologyの分野の全72雑誌中53位から45位へと上昇した。	2025年1月から2026年12月までの任期で刊行委員、常任刊行委員が新規に任命された。刊行委員は原則、査読回数が多い会員が任命され、査読に携わらなかった委員は退任となった。その結果、刊行委員は、全体で146名のうち新規に44名が任用、54名が退任となった。	2025年にIFが3.41に上がったことから投稿数が増加しており、刊行委員をはじめ査読の負担が増加してきている。適切な査読数が増えるように、質の低い論文はなるべくEIC判断でリジェクトするように取り扱っている。
田中	PI常任刊行委員会	田中 伸哉	PINは学会の英文機関誌であるので、質の高い病理学研究を数多く掲載して、会員自身が研究成果を是非PINに投稿したいと考えるようなプレッシャーをかけることは避けたい。現在初回判定まで9日と非常に短時間で査読が行われており、迅速な審査を心掛けた。	常任刊行委員は、各査読領域1名から3名で構成されており、総勢41名で、各領域の委員と相談しながら適宜交替となった。ワイリー社の都合で、査読システムのWEBシステムが変更となり運用面でわかりにくい部分もあるが、PINの事務局がその都度対応しており査読に遅延は生じていない。2024年10月から、FAST TRACK制度は廃止となった。	投稿数の増加については、刊行委員に加えて、査読全体をハンドリングする常任刊行委員の負担も相当なもので、分野によっては一人のAEIに常時複数件数を取り扱ってもらう分野も複数分野ある。今後そのような分野はAEの増員も検討する必要がある。また現在のワイリー社の査読システムには、不備が多く、誤作動も生じており、検討が必要と思われる。
	「診断病理」編集委員会	牛久 哲男	会員にとって有意義な総説の企画、掲載を充実させる。投稿規定等の見直しを行う。診断病理の電子化とそれに伴うDOI付与を完了する。	オンラインジャーナル掲載プラットフォームであるJ-stageを利用した診断病理の電子化、オープンジャーナル化に向けた作業が完了し、2025年4月号からJ-stage掲載がスタート予定である。幅広い読者に読まれる雑誌になることが期待される。	オンラインジャーナル掲載プラットフォームであるJ-stageを利用した診断病理の電子化、オープンジャーナル化を完了した。アクセラデータからは毎月日本からのアクセスが数千、米国、中国を中心に海外からのアクセスも同程度にまで、広く読まれる雑誌となった。
牛久	病理専門医部会会報編集委員会	池田純一郎	『診断病理』の発刊に合わせて年4回の会報を発行する。専門医制度に関わる最新情報を専門医・専攻医の皆様に周知するとともに、各号の特集記事、各支部学術活動報告を含め、充実した内容を盛り込んでいきたい。	『診断病理』の発刊に合わせて年4回の会報を順調に発行している。専門医制度に関わる最新情報を専門医・専攻医の皆様に周知するとともに、各号の特集記事、各支部学術活動報告等を充実させたものにするべく検討している。	『診断病理』の発刊に合わせて年4回の会報を滞りなく発行した。専門医制度に関わる最新情報を専門医・専攻医の皆様に周知するとともに、各号の特集記事、各支部学術活動報告等を充実させたものにするべく委員会での検討を行い、特集記事のテーマ等を決定した。
	剖検情報委員会	宇於崎 宏	過去から引き継いでいる、剖検情報の収集と活用、剖検情報誌の編集に、引き続き努めて参ります。本委員会でもICD-11の日本での活用状況に対応して参ります。	剖検情報誌65号を発売し、66号のデータを整理している。ICD11の日本適用に対応、疾患コードの検討を行っている。	剖検情報誌65号、66号を発売した。現在、67号のデータを整理している。ICD11の日本適用に対応、疾患コードの検討を行った。
	癌取扱い規約委員会	都築 豊徳	委員の若返り及び女性参画を促進する。ICCRとの協力体制を継続し、国際的に通用する規約作成を目指す。規約改正の情報を早期に会員に提供できる体制維持に努める。	体癌取扱い規約に対して、委員の推薦を行った。規約の現状に対するアンケートを行った。	秋期特別総会にて、規約に関するシンポジウムを行った。規約に関するアンケート結果を報告した。アンケート結果を基にして、論文を作成中である。
都築	小児腫瘍組織分類小委員会	井上 健	代表的な希少がんであり、時に病理診断が難しい小児腫瘍について、症例検討会や教育講演を行うとともに、小児腫瘍のWHO分類が新たに刊行されたことを受け、小児腫瘍の病理診断に際して「小児腫瘍病理診断の手引き」を公開する予定である。また、「希少がん診断のための病理医育成事業」とも協働しつつ、小児病理医の育成に注力していきたい。	小児腫瘍症例検討会を2024年9月6日に開催し、24症例の提示・検討を行うとともに、小児肝腫瘍についての教育講演を開催した。症例検討会の内容は、日本小児血液・がん学会雑誌2025年1月号に掲載予定である。また、「小児腫瘍病理診断の手引き」を作成し、2024年10月2日に日本病理学会会員専用ページに公開した。引き続き小児病理医の育成に尽力していく予定である。	昨年度に引き続き、令和7年度には小児腫瘍症例検討会を2025年9月6日に開催し、22症例の提示・検討を行った。症例検討会の内容は、日本小児血液・がん学会雑誌2026年1月号に掲載予定である。昨年度公開した小児腫瘍病理診断の手引きや、病理診断コンサルテーションをはじめ、小児腫瘍に関する活動は当委員会が中心となって継続している。
	日本病理学会領域横断的がん取扱い規約検討WG	渡邊 麗子	癌治療学会では、領域横断的癌取扱い規約検討委員会の新委員長、新副委員長が決まり、令和6年2月19日の理事会で領域横断的がん取扱い規約第二版の改訂計画内容が承認された。4月には病理学会を含む関係学会からの代表委員が集まって第2版改訂作業の具体的な作業工程を立案し、令和6年度中の出版を目指す。	領域横断的癌取扱い規約第2版の出版は2025年夏～秋、出版社は金原出版株式会社の見込みで準備中。	2025年夏にUICC第9版が出版されたことから、2024年から準備してきたきき案の見直しを迫られることとなった。日本癌治療学会領域横断的がん取扱い規約検討委員会と審議の上、第2版領域横断的がん取扱い規約の出版は2026年秋以降へ延期することが了承され、引き続き新・第2版たきき案の作成を本WGで担当することになった。
	病理診療ガイドランス委員会	金井 弥栄	領域横断的がん取扱い規約、AIガイドランス、ゲノム研究用・診療用病理組織検体取扱い規程等、各種診療等のガイドランスの適正な作成を行うための、基盤整備を行う。極力フォーマットを統一し、重複を最小限にし、現場の実用に資するガイドランスと定めるよう、利便性の向上を目指す。また各策定委員会に関して、適切な利益相反管理を行う。	領域横断的がん取扱い規約、AIガイドランス、ゲノム研究用・診療用病理組織検体取扱い規程等、各種診療等のガイドランスの作成を担当する委員会の代表等が会合し、編纂の進捗と基本方針を共有した。治療選択にかかわる含むガイドランスを策定する委員会において、日本医療機能評価機構EBM医療情報部(Minds)「診療ガイドランス策定参加資格基準ガイドランス2023」にそって、COIの取り扱いは行われるように取り計らった。	領域横断的がん取扱い規約、AIガイドランス、ゲノム研究用・診療用病理組織検体取扱い規程等、各種診療等のガイドランスの作成を担当する委員会の代表等が会合し、編纂の進捗度合いを互いに報告して、改訂版発行についての基本方針を共有した。
金井	病理診断支援AIの手引き策定WG	吉澤 明彦	近年の病理診断領域におけるAIの広がりを背景に、本WGでは「病理診断支援AIの手引き」を策定、発表してきた。本WGでは、自由な研究の領域は確保しつつ昨今のAIの適切な利用のあり方を念頭に時代に即した内容を今後も定期的に提案していくことを目標とする。一方でAIは多様化しており、2023年度後半から開発経験をもつ若い世代の委員を招聘したが、スピード感をもって発信することが一つの課題である。	「病理診断支援AIの手引き」の改訂作業を行っているなかで病理診断支援AIのプログラム医療機器の基準を示すようSaMDより要望があり、その基準をPMDAの提示を仰ぎながら進めてきた。2025年4月には発表する予定である。以降、改訂作業を進める。	2024年改訂された「病理診断支援AIの手引き」の改訂を進めている。内容としては、昨今のLLMの隆盛に鑑み、その病理診断への応用や、リテラシーの周知を主な目的としながら、PMDA申請者へのための開発項の改訂を進めている。会議は月に1度行われ、1月には集合会にて議論をつめた。2026年内の改訂、発表を目的としている。
	ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程策定WG	畑中 豊	初版発行から数年が経過したため、新規実証データやRWD等に基づき診療用規程の改訂を行う(前期から改訂作業継続中)。令和4年度に発行した「がん全ゲノム解析のための検体取扱いガイドランス 第1版(暫定版)」について改訂を検討する。	「ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程 改訂第2版」の「がん全ゲノム解析のための検体取扱いガイドランス 第1版(確定版)」のいずれも令和6年度内の発行を予定していたが、新規実証データの収集等に時間を要し遅れに遅れている(現在進行中)。いずれも次年度での発行を目指している。	「ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程 改訂第2版」のドラフトが概ね完成。「がん全ゲノム解析のための検体取扱いガイドランス 第1版(確定版)」の実証データのとりまとめが概ね完了し、いずれも次年度発行予定。
	固形癌HER2病理診断ガイドランス策定WG	金井 弥栄	「固形癌HER2病理診断ガイドランス 第3版」発行のため、乳癌・胃癌・嚥液性癌・大腸癌について、サブワーキンググループごとに執筆を進めた。エンハンサーの適用拡大等に向けて、執筆の任に適切な委員の追加を行ない、免疫染色検査パートの充実を目指している。Minds「診療ガイドランス策定参加資格基準ガイドランス2023」に従って適切にCOIを取り扱っている。	乳癌・胃癌・嚥液性癌・大腸癌について、サブワーキンググループごとに「固形癌HER2病理診断ガイドランス 第3版」の執筆を進めた。あらたに加わったHER2低発現例のHER2病理診断や、臓器横断的事項に関する記載を、特に充実させた。Minds「診療ガイドランス策定参加資格基準ガイドランス2023」に従って適切にCOIを取り扱っている。2026年2月に日本病理学会員に向けてパブリックコメントを募集しており、同2月末に学会内外に向けpdf版を全文無償でダウンロードできる形で第3版を発売する予定である。	乳癌・胃癌・嚥液性癌・大腸癌について、サブワーキンググループごとに「固形癌HER2病理診断ガイドランス 第3版」の執筆を進めた。あらたに加わったHER2低発現例のHER2病理診断や、臓器横断的事項に関する記載を、特に充実させた。Minds「診療ガイドランス策定参加資格基準ガイドランス2023」に従って適切にCOIを取り扱っている。2026年2月に日本病理学会員に向けてパブリックコメントを募集しており、同2月末に学会内外に向けpdf版を全文無償でダウンロードできる形で第3版を発売する予定である。
佐々木	子宮頸部上皮内腫瘍p16免疫染色ガイドランス策定WG	三上 芳喜		新設	p16免疫組織化学染色が適切に実施され、子宮頸部上皮内病変の診断精度が向上することを目指して、日本産科婦人科学会、日本婦人科腫瘍学会の協力を仰ぎ、『p16免疫組織化学を併用した子宮頸部上皮内病変の病理診断ガイドランス』の作成に着手した。2025年10月8日第1回のウェブ会議を開催し、作成したドラフト(第1稿)をもとに討議を行い、その内容をともに加筆・修正や解説用画像の追加・差し替えを行った。次期WGではファクトチェックを進め、修正文言の修正を行い、最終版を完成させる予定である。
牛久	用語委員会	伊藤 智雄	適切かつ統一された用語の使用は重要であり、適宜ミッションを確実に履行し、適切な用語の定義等の策定に努める。	厚生労働省より依頼された「疾病及び関連保健問題の国際統計分類」の第11回改訂版(ICD-11)和訳作業に対する精査と意見を行った(8万用語、内病理関連5百超)。現在、厚労省が取り纏め(延期されている)。	厚生労働省より依頼された「疾病及び関連保健問題の国際統計分類」の第11回改訂版(ICD-11)和訳作業に対する精査と意見を行った(8万用語、内病理関連5百超)。負担の大きいミッションであり、会議にてAIの活用についての提言を行ない、AIの使用は差し支えないとの見解を得た。

常任理事 担当者	委員会名	委員長	令和6/7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告(令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	活動総括(令和7年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
豊國	研究推進委員会	増本 純也	基礎医学としての「病理学」だけでなく、臨床医学を支える「病理診断」においても、急速に発展する分子生物学、生化学、遺伝学、免疫学、AIなどの情報技術の知識へのキャッチアップが重要な課題です。このような病理学会会員のニーズに応えるべく、病理学会カンファレンスで先端研究や先端技術を紹介し、ひいては、一般会員のみなさんや、医学部学生にもリサーチマインドに溢れた「病理学」の魅力を感じたいと思います。	第20回日本病理学会カンファレンス(山形大学世話人:二口充教授)を2024年7月26日27日に山形テラス アブロードで開催した。第21回日本病理学会カンファレンス(愛媛大学世話人:増本純也教授)を2025年7月25日26日に道後温泉ホテルの守で開催予定である。第114回総会「先端の分子病理学講習会」のテーマと講師として石津 明洋 先生(北海道大学)「抗がん剤細胞外トラップ(NETS)」と病態形成(渡辺 亮 先生(京都大学)「空間的遺伝子発現」柴田 龍弘 先生(東京大学)「ゲノム解析によるがんの理解」榎本篤先生(名古屋大学)「がん線維芽細胞の多様性」)で開催予定である。その他女性病理医に参加のしやすいカンファレンスやイベントの方法を検討中である。	第21回日本病理学会カンファレンス(世話人:愛媛大学増本純也教授)を2025年7月25日26日に道後温泉ホテルの守で開催した。第22回日本病理学会カンファレンス(世話人:熊本大学荒原教授)を2025年7月17日18日に熊本県医師会館で「実験病理学を再考・再興する」をテーマに開催予定である。第114回総会(山形)での「先端の分子病理学講習会」は盛況であった。第20回山形での日本病理学会カンファレンスのアンケートでは参加者が固定されていることへの懸念が示されていたが、講師を准教授中心にしたことで第21回に初めて参加された若手の参加者が多くいたことは成果であった。また託児や親子休憩室の設置を常態化できたことも成果であった。
	研究委員会	豊國 伸哉	研究委員会が掌握する日本病理学会として取り組む研究事業に関して適切な運営が行われているかどうかを管理・指導する。個人情報や匿名加工情報の取り扱いを適切に実施したい。JP-AID DB推進事業ならびにSCRUM Japanとの共同研究が開始しており、病理学会のさらなる発展のための環境作りを推進する。	希少がん事業と小児腫瘍組織分類小委員会は適切に運営されている。JP-AID事業では、その利用を希望する大型案件が順調に採択され、病理学会の財源の一部となっている。国立がんセンターよりSCRUM-Japan MONSTAR-SCREENIに関する共同研究の申し出があり、会員の参加が可能となるようすり合わせを進めつつある。	希少がん事業は毎年適切に運用されている。JP-AID事業は、2026年度より匿名加工されたB版を製品として扱うこととなった。2025年度は利用がやや減少した。小児腫瘍組織分類小委員会は適切に運用されている。アステラス助成金を2年連続で採択され、育員の教育活動に使用された。SCRUM-Japan MONSTAR-SCREENI 共同研究は、会員の利用に向けて、準備が進められている。現在、テストケースを倫理委員会から立ち上げ、実施中である。
	JP-AID DB推進事業WG	倉田 盛人	およそ9.6万症例分の病理デジタル画像(Pathology-Whole Slide Imaging: P-WSI)を収録した「日本病理学会デジタル画像データベース」を維持・管理を行う。現在までに、病理学会会員は無料で検索・閲覧出来るシステムが構築されているが、生涯教育などに活用可能であることを学会員に広く情報共有を行う。また、利用者は希望に応じてP-WSIをダウンロードしてAI研究等に利用することが可能であるが、さらなる利便性を向上させたデータベースに移行させる。	デジタル画像データベースはこれまでに合計18.8万枚のダウンロード利用申請があった。これまでは大容量のデータを使用する際には、ダウンロードなどにおいて不便が多かったが、利便性向上のため、データベースの移行作業を行い、検索・ダウンロード機能の強化を行った。今後、さらなる機能強化を図りながら、引き続き多くの研究者に利用頂けるように努めたい。また、今回は教育コンテンツとしての可能性をも積極的に検討する予定である。	デジタル画像データベースは設置初期と比較し、システムの移行および更新を重ねることで、検索・ダウンロード機能は大幅に向上し、生涯学習やAI研究を含め多くの研究者にも利用頂いてきた。JP-AID事業から引き継いだデータベースの研究としての側面は、本年度をもつて終了する。今後、匿名データベースは成果物として、引き続き、生涯学習やpWSIを用いた研究等に活用できるシステムとして整備を進めていく。
佐々木	希少がん病理診断支援検討委員会 (※希少がん診断のための病理医育成事業)	佐々木 毅	2024年度は国庫補助金として、3,500万円の予算をいただき、新たに希少サブタイプとして消化器と呼吸器を加え、10領域(骨軟部、脳腫瘍、小児腫瘍、リンパ腫、頭頸部、皮膚腫瘍、希少サブタイプ-乳腺、希少サブタイプ-婦人科、希少サブタイプ-消化器、希少サブタイプ-呼吸器)で、全領域による希少がん病理診断講習会を4回と希少がんEラーニング問題全領域での作成を行う。またエキスパート育成講習会については、10領域すべてで行うことを計画している。さらに2025年度予算獲得に向けて、厚労省に対して新たな事業計画案を希少がん病理診断支援検討委員会にて検討する。	新たに希少サブタイプとして消化器と呼吸器を加え、希少がん病理診断講習会4回とエキスパート育成講習会10領域(骨軟部、脳腫瘍、小児腫瘍、リンパ腫、頭頸部、皮膚腫瘍希少サブタイプ-乳腺、希少サブタイプ-婦人科、希少サブタイプ-消化器、希少サブタイプ-呼吸器)で、全14回の講習会を開催した。さらに2026年度予算獲得にも成功し、2026年度も事業を継続する予定である。	国庫補助金事業として、希少がん病理診断講習会(WEB)を年に5回、若手の希少がん分野へのリクルートを目的に、エキスパート育成講習会を5領域(婦人科・消化器・泌尿器・乳腺・呼吸器)を開催した。希少がん病理診断講習会にのべ3,000名以上が参加して盛況であった。またWSIを含むEラーニング問題も、登録症例数が2,000症例を超え、病理専門医更新のための領域講習の単位としても活用が進んでおり、今後も継続的に分野ごとにも拡充していく計画である。
	ゲノム研究用病理組織検体採取規程策定委員会	金井 弥栄	病理組織検体をゲノム等オミックス研究に資する品質を保持して収集・保管することで、日本病理学会員が次世代のゲノム医療を創出する研究に貢献できるよう、病理組織検体採取規程を標準化する。新規に普及したオミックス解析手法に対応するように、現行の規程を実証解析に基づいて改訂し、研究基盤整備における病理学の意義を日本病理学会外にも発信できるようにする。	ゲノム病理標準化講習会受講者等から要請のあった解析項目を追加し、追加実証解析データを取得して『ゲノム研究用病理組織検体採取規程(補遺版)』を作成した。日本病理学会のガイドライン類は全般に、頻回の改訂を速やかにWebページから発信する方針に転換しているため、研究用規程改訂版も学会内外に無償で公開することを決定した。研究目的で行われる。メタボローム・プロテオーム解析に対応した病理組織検体採取規程の標準手順を定めるための、実証解析を準備している。	ゲノム病理標準化講習会受講者等から要請のあった解析項目について、追加実証解析データを取得し、『ゲノム研究用病理組織検体採取規程 第2版』を執筆・発行した。学会内外に向け、pdf版を全無償でダウンロードできる形で発行した。ゲノム病理標準化講習会のテキストとしても使用するもので、受講者等から好評である。次年度以降に追加する実証解析項目を決定し、継続的に改訂を重ねる方針を決定した。
豊國	SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN事業検討WG	谷田部 恭	・パイロットスタディーを立ち上げ、病理学会会員が利用するにあたっての概要・課題を得る。 ・具体的な道筋を立てた後、会員に公募し研究を募る。必要に応じて推薦枠を設ける。 ・研究の進捗を管理し、SCRUM-病理学会への報告を行う。	・多忙な先生方が多く、予定が合わないことから委員会の開催が難しかった。 ・パイロットスタディーのための研究計画を早急に確定し、倫理審査委員会へ提出したい。	・広く会員からの共同研究を募るため、どのような研究が可能であるかを示す必要がある。具体的な例を示すとともに、共同研究を実施する上での障壁を確認するため、パイロット研究を行うことをはじめのマイルストーンとした。 ・パイロット研究の研究計画書を作成し、倫理審査委員会からの承認を受けるとともに、データアクセス権の設定を行い、パイロット研究を始める基盤を構築した。 ・R8年度より、具体的な研究を始め、広く共同研究が募ることが出来る環境を構築したい。
	病理専門医制度運営委員会	森井 英一	日本専門医機構と連携しながら、病理専門医研修プログラム、専門医認定試験、資格更新の運営と改善を図り、質の担保された専門医制度を実現する。さらに病理専門医数の向上を目指した制度設計を図る。	日本専門医機構と連携しながら、病理専門医研修プログラム、専門医認定試験、資格更新の運営と改善を図り、質の担保された専門医制度を維持している。施設認定についても新たな認定制度を検討している。	日本専門医機構と連携しながら、病理専門医研修プログラム、専門医認定試験、資格更新の運営と改善を図り、質の担保された専門医制度を維持している。施設認定についても新たな認定制度を制定し、普及に努めている。
森井	病理専門医資格審査委員会	中黒 匡人	審査の作業手順が徐々に複雑になってきており、審査の効率化、将来のリモート審査の方向を見据え、更新審査でも電子化を進めたい。受験資格審査は順調に電子化が完了している。	電子申請を併用した更新審査の初年度を無事終えた。資格審査・更新審査とも基本形が完成したので、より業務の効率を上げるように細部の微修正を行って行く予定である。	受験申請・更新とも電子化されて2年目を終えた。アンケートの上でも評価は高く、引き続き使いやすいシステムを目指して改善を行っていく予定である。
	病理専門医試験委員会	柴原 純二	WSI等を活用した新たな形式での専門医試験が定着した。引き続き試験の質を担保の上、円滑な試験運営を目指すとともに、従来の様式を引き継いだ現状の試験の内容について検討を行い、必要に応じて改善を行う。	病理専門医試験は適切な内容で、円滑に実施されている。病理専門医試験の出題基準となる「病理専門医 専攻医マニュアル」の「研修すべき知識・技術・疾患名リスト」の改訂を行った。	改訂した「病理専門医 専攻医マニュアル」の「研修すべき知識・技術・疾患名リスト」を新たな出題基準として、適切な内容で病理専門医試験を実施した。
	病理専門医試験実施委員会	非公開			
	病理専門医施設審査委員会	坂谷 貴司	施設認定については、認定施設A、B、S、登録施設、研修協力施設の区分で長らく行なっているが、専攻医養成なども鑑み「認定教育施設」として新区分の制度設計を行い、周知後、2年間の任期内に施行する。学会による認定施設と専門医研修プログラムにおける基幹・連携施設の位置づけについてわかりやすいものとする予定である。各施設からの申請によって認定を行うため、従来の登録施設認定の際に記載を求めた研修責任施設は置かない方向で検討している。2026年秋に新施設制度による申請受付、2027年4月の施行を目指している。	新施設制度の制度設計を進めているところである。指導医および専門医数や常勤の有無、組織診断数、剖検数などによって施設を4つに区分し、専門医研修プログラムにおける基幹・連携施設の位置づけについてわかりやすいものとする予定である。各施設からの申請によって認定を行うため、従来の登録施設認定の際に記載を求めた研修責任施設は置かない方向で検討している。2026年秋に新施設制度による申請受付、2027年4月の施行を目指している。	予定どおり新たな施設認定制度を制定することができた。日本病理学会認定施設「S」「A」「B」「C」の4区分として、2027年4月に新制度開始予定である。病理医が関わっている医療機関を広く認定するものであり、専門医研修のためのみならず、広く国民に病理医の存在を知っていただくことを念頭に置いた新たな施設認定制度となっている。
	病理専門医研修プログラム審査委員会	大橋 健一	プログラムの審定について、各プログラム責任者に適切に情報を伝え、スムーズに審査を進める。全国的な剖検数の低下に対しても、できるだけ病理専攻医の定員が下がらず、志望者の減少が起きないように対応する。	プログラムの改定について、各プログラム責任者に適切に情報が伝えられ、審査はスムーズに進められた。全国的な剖検数の低下に対しても、年次調整の制度を取り入れてできるだけ病理専攻医の定員が下がらないように、志望者の減少が起きないように対応した。2025年度は100人を超す新たな専攻医の登録が見込まれている。	プログラムの審査は円滑に進められた。全国的な剖検数の低下に対しても、年次調整の制度を取り入れてできるだけ病理専攻医の定員が下がらないように、志望者の減少が起きないように対応した。
佐々木	分子病理専門医制度運営委員会	佐々木 毅	分子病理専門医設立当初より検討課題に挙げられていた、病理医以外の他領域への分子病理専門医認定に関してWGを立ち上げ、検討する。また、講習会に関して、分子病理学に関する基礎的な内容と、分子病理専門医を取得した後の高度な内容とが、1つの講習会で行われているなどの課題があり、目的別に、分子病理専門医講習会、分子病理専門医更新講習会、分子病理診断講習会-分子病理を学びたい人のために-の3つの講習会に分類し行う予定である。	3つの講習会「分子病理専門医講習会(分子病理専門医受験のための講習会)」「分子病理専門医更新講習会(更新までには受ける講習会)」「分子病理診断講習会(分子病理を学びたい人のために)」に関して各2回の講習会を開催した。なお「分子病理診断講習会(分子病理を学びたい人のために)」に関しては、専攻医の若い先生方も参加していることから、来年度から受講費を20,000円から10,000円と値下げすること、分子病理診断に関する講習会であることから関係学会に周知することが承認された。なお、本年度の分子病理専門医試験の合格者は119名、更新者は118名であった。	分子病理専門医関係の講習会であるが、それぞれの参加者は「分子病理診断講習会」が216名、「分子病理専門医更新講習会」が332名であった。また今年より20,000円から10,000円に受講費を値下げした「分子病理診断講習会(分子病理を学びたい人のために)」には384名の参加があり、全体で約965万円の収益事業となった。なお、第6回分子病理専門医試験の受験者数は、138名、うち合格者は104名、合格率は75.36%とほぼ昨年並みであった。一方で資格更新者は175名であった。
	分子病理専門医研修委員会	西原 広史	本委員会では、分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集を行う。また検査制度の変更に伴って、必要な改訂を行う。さらに、今年度からは、分子病理診断講習会を企画し、病理診断を目的とした遺伝子検査の臨床実装に向けた教育啓蒙活動を開始する。	本委員会では、承認された新規のCGP検査や保険診療要件の改定に合わせて分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集を行っている。令和7年度は、カリキュラムの細目の追記、参考図書等の整理を実施した。また、2年目を迎えた分子病理診断講習会の講演テーマと講師の選定を行い、WHO分類第5版に従った分子分類に対応するために必要な情報提供活動を実施している。	本委員会では、承認された新規のCGP検査や保険診療要件の改定に合わせて分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集を行っている。令和7年度は、カリキュラムの細目の追記、参考図書等の整理を実施した。がんゲノム医療が一般化する中で、分子病理専門医に求められる役割が通常のがんゲノム検査の管理だけでなく、分子病理専門医を主体的に行う立場が追加され、それに必要な知識とスキルを学ぶことができるカリキュラムに変更する必要がある、という意見を集約し、時期委員会に提案することになった。
	分子病理専門医資格審査委員会	畑中佳奈子	分子病理専門医更新申請の電子化を行い、分子病理専門医に関する申請と審査の電子化をさらに進める。また、分子病理専門医研修委員会と連携し、分子病理専門医更新講習会のプログラム作成を行う。	分子病理専門医更新申請の電子化を行い、新規・更新申請の双方の電子化を達成し、審査の簡便化、迅速化が可能となった。2025年度分子病理専門医更新講習会プログラムは、更新に向けた必要知識の習得が可能な内容を盛り込んでいる。	分子病理専門医の新規審査、更新審査とも電子申請可能となり、審査もすべてクラウド経由で行える仕組みを確立した。今年2回の分子病理専門医更新講習会のプログラム作成、実施も軌道にのった。がんゲノム医療体制や分子病理専門医に求められる役割は未だ流動的であり、これらの変化に対応しながら資格審査の内容も必要に応じて検討していくことが求められている。
	分子病理専門医試験委員会	前田 大地	ゲノム病理学的な知識に関するリテラシーの向上につながる試験の構築を目指す。日々刻々と変わっていくゲノム医療に即応できるような体制の整備が課題である。	分子病理専門医試験の運用方針、出題の意図に関して委員間のコンセンサスを得たうえで、試験実施に至った。今後の課題についても討議を行い、来年度以降につなげていく方針である。	分子病理専門医試験の試験内容の妥当性を確認した。受験者の解答をポイントした上で、点数分布をふまえた合格基準の設定を行った。今後は、分子病理専門医の在り方に関する議論を深め、試験の様式の変更を含めて検討して必要があると考えている。
	分子病理専門医試験実施委員会	非公開			
森井	分子病理専門医認定拡大検討WG 活動休止予定	佐々木 毅	分子病理専門医認定立ち上げ当初から計画されていた、「認定制度開始、5年後くらいをめどに、認定を病理医以外にも枠を広げる」に関してWGを立ち上げ、検討する。	拡常任理事等から病理学に精通していない者に「分子病理専門医」の称号の付与は適切なかの議論があり、また臨床検査医学会で検討していた、他の診療科も含めた遺伝子検査専門医制度も、臨床検査専門医を対象とした研修とするとの連絡を受け、病理学会でも機が熟すまで、一旦WGを終了することとした。	活動休止
	口腔病理専門医制度運営委員会	清島 保	より社会ニーズに合うよう、分子病理学的見地も加えた「口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供」についての検討を引き続き行う。専門的知識・経験に基づいた社会貢献や自らの知識・技能の向上に関し、関連する委員会の助言・協力の上、口腔病理医が自己研鑽を続けて社会へ還元できるように教育等の環境整備とその改善を図る。	分子病理学的見地も加えた「口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供」を鑑み、口腔病理専門医資格更新のための生涯学習基準と単位に「口腔病理に関する講習会の単位化を行い、次年度より追加する。また、口腔病理専門医資格更新基準の改訂に伴う移行期間中に医療に関する共通講習会の受講必須となるため、HPを利用しての周知徹底を図っている。	口腔病理専門医資格更新改訂に伴う移行期間が終了した。移行期間中は基準や手続きに関して説明会やHPを利用した周知徹底を図った。また、令和4年度より分子病理専門医(口腔)の認定開始に伴い、「口腔病理専門医資格更新のための生涯学習」に分子病理に関する講習会の単位化を行った。今後も専門的知識・経験に基づいた社会貢献や自らの知識・技能の向上のため、関連する委員会との協力の上、口腔病理医が自己研鑽を続けられるよう整備を進める。
	口腔病理専門医試験委員会	入江 太郎	①人再現性・異時再現性の高い病理診断が行い得る良質な標本・症例を用いること、②現場で遭遇する頻度が高い症例を用いること、③Subspecialtyとして相談を受けることが実際にある症例を用いることを方針としつつ適切な試験が実施される様を図りたい。また、病理解剖経験の少なさを補い得る様な教育研修体制の整備についても各委員会との連携協力に努めたい。	質の高い医療を提供し得る口腔病理専門医の資格試験となる様に試験範囲と内容を検討し、適切な口腔病理専門医資格試験が実施されたこととなった。また、しぼり抜くこととなった。なお病理解剖に関する試験は中止となったため、しぼり抜くこととなった。なお病理解剖に関する試験は中止となったため、しぼり抜くこととなった。次回には3月末に行う予定である。「診療に関する記録(ブロック、スライドガラス、デジタル画像など)」の保管期間については現在、医療委員会等で検討を開始している。厚労省「検査責任」も確認し、「医務責任」の適応に関しては、「教室ブローベ」検査センター検査報告書も対象となることを保険会社に確認した(三井住友、損保ジャパン、東京海上)。	現場で遭遇する頻度が高い、良質な標本・症例を用いた試験が実施し得たと考え、全身疾患に対する幅広い知識を持って口腔領域の病理診断を担当できる口腔病理医の育成を目指しつつ、病理解剖経験の少なさを補い得る様な教育研修体制の整備を今後も継続して頂きたい。
	口腔病理専門医試験実施委員会	非公開			
	口腔病理専門医資格審査委員会	美島 健二	口腔病理専門医試験の資格審査については、試験申請要綱に則って適切な確かな運用を行いたいと考えています。本年度は新基準に則って、資格更新の3年目(5年で全面移行)にあたります。昨年同様、本年度の更新予定者を対象にWeb説明会を実施し、丁寧な運用を進めたいと考えます。	口腔病理専門医試験の受験資格審査を実施し、全ての申請者が受験資格の要件を満たしていることを確認した。また、資格更新については、新基準による審査の移行期3年目にあたり、Web説明会にて当該移行年度における更新要件に関して説明しました。その後実施された更新審査についても、特に大きな問題はみられませんでした。	口腔病理専門医試験の受験資格審査については、申請者の提出書類に不備などもなくスムーズに実施することができました。また、口腔病理専門医資格更新審査については、新基準の移行期の最終年度を迎え、継続的に資格審査の更新講習会を実施することにより、大きな問題なく審査を終えることができました。令和8年度は、新基準の本格実施の年となるのでしっかりと次の委員長に引き継ぎを行いたいと考えます。
口腔病理専門医制度基盤整備WG	森 泰昌	口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供を目的とし、口腔病理専門医の継続的な輩出と社会的貢献のため、研修システムの在りかたや全国の歯科大学以外の口腔病理医の在籍状況についてリスト作成など引き続き検討する。加えて関連する機関との連携等口腔病理の認知度向上につなげるWG案を作成し、口腔病理専門医制度運営委員会へ提出する。	今年度は、全国の地域をブロック化し口腔病理専門医の勤務状況についての調査、リスト作成を進めている。また全国の口腔病理診断実施施設(施設代表者)に、病連携に関するアンケートを行うことについて協議し病連携の検体の受入れ余地、問題点、疑問や懸念事項に関してご意見を集約することとした。	全国の地域ブロック化口腔病理専門医の勤務状況についての調査、リストについて病理学会の口腔病理専門医の登録を基に新規名簿の確認作業を進めていく。全国の口腔病理診断実施施設(施設代表者)に、病連携に関するアンケートを行うことについて協議し口腔病理単独よりは、医科と歩調を合わせて病連携携携の余力の現状分析を進めていく事となった。	
佐々木	医療業務委員会	佐々木 毅	・タスクシフト・シェアに関して具体的な検討を行う。・病理解剖に関して、病理学会としての新たな見解を示す(臨床検査技師に対して、厚労省が厚生労働大臣名で「死体解剖実施者」などの称号で、病理解剖を(単独で)行うことができる資格付与を検討することへの対応を行う。・デジタルプロジェクトの導入に伴い、ガラス標本等の保管に関する病理学会の見解を示す。・病理解剖後のホルマリン等に浸漬された臓器の返還要求に関して、厚労省の病理解剖指針には、「遺族からの要求があれば返却しなくてはならない」とあるが、返却に関する病理学会としての見解、方針を示す。・病理診断報告書、細胞診断報告書、病理解剖報告書の患者への提示、提出に関して、病理学会としての方針を示す。	・病理解剖に関しては、臨床検査医学会から「検査技師は単独では病理解剖を行わない方針であること」の連絡があり、また厚労省医政局免許室での「臨床検査技師」「病理解剖実施者」の資格を付与する議論は中止となったため、しぼり抜くこととなった。なお病理解剖に関する試験は中止となったため、しぼり抜くこととなった。次回には3月末に行う予定である。「診療に関する記録(ブロック、スライドガラス、デジタル画像など)」の保管期間については現在、医療委員会等で検討を開始している。厚労省「検査責任」も確認し、「医務責任」の適応に関しては、「教室ブローベ」検査センター検査報告書も対象となることを保険会社に確認した(三井住友、損保ジャパン、東京海上)。	・病理解剖に関しては、内科学会に依頼して、アンケート調査を行っていた。2026年4月の病理学会において日本内科学会との共同シンポジウムを開催する予定である。 ・日本臨床衛生検査技師会とは、タスクシフトに関して、5月1日付で共同声明を発表した。生検検体の下書きや検査技師単独での病理解剖は行わないなど、病理学会の意向をほぼ組み込んだ共同声明の発出となった。 ・検体の保管期間については確定した見解までとり着かず、次期体制へ引き継ぐこととなった。 ・医務責任に関しては、検査センター、教室ブローベでの診断に使用可能かどうかに関して、医務責任の各社担当者と対面して確認した。
	コンサルテーション委員会	久岡 正典	令和6年度から稼働開始となる日本病理学会・国立がん研究センター病理診断コンサルテーションシステムの円滑な運営と管理を行い、会員の日常の病理診断を引き続き支援すると共に、我が国の医療の均てん化と質向上に一層貢献する。	令和6年度日本病理学会と国立がん研究センターの病理診断コンサルテーションシステムを統合して運営しており、目下順調に稼働している。委員会を3回開催し、システムの運営状況や診断意見報告の進捗状況等の確認と共にコンサルタントや領域チームリーダーの増員、利用者の資格基準などについて議論した。	令和6年度から稼働開始となる日本病理学会・国立がん研究センター病理診断コンサルテーションシステムを稼働し、コンサルテーション業務のより円滑な運営と管理を行うことで依頼件数が大幅に増加し、会員の病理診断業務に一層寄与することができた。

常任理事 担当者	委員会名	委員長	令和6/7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告(令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	活動総括(令和7年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
佐々木	社会保険委員会	佐々木 毅	・令和6年診療報酬改定での積み残し課題に関して、令和8年診療報酬改定での要望等について検討を行う。・個別の診療報酬改定の項目とは別に、病理診断科診療所開業の際の「保険診療が全くできない6か月問題」の解決をはかる。	・病理診断科診療所の「6か月問題」に関しては、理事長とともに立法院にも依頼。また当時担当した厚労省医系技官にも確認したところ「6か月間保険診療は全くできない」ということを想定していなかったとのこと。今後も交渉を続ける。・R8診療報酬改定では、R6改定に引き続き「悪性腫瘍遺伝子病理組織標本加算」を子宮体癌と脳腫瘍(神経膠腫)に絞って要望。これに関連する研究(ガイダンス作成等)を厚労科研で病理学会として行う予定。・R8診療報酬改定ではR6改定の積み残しを中心に要望することとした(毎回算定など)。	・病理診断科診療所立ち上げの際、保険医療機関と開業してから6か月間、検査センターの標本診断は受託できないという、いわゆる「6か月問題」に関しては、交渉はしたものの、改善は見られなかった。・R8診療報酬改定に関しては「悪性腫瘍遺伝子病理組織標本加算」を病理学会からの1位要望で提出、なおかつ病理学会として厚労科研の支援の下、ガイダンス作成も行ったが、実現しなかった。R6改定では、特殊染色加算、病理診断管理加算1及び2の増点、国際標準病理診断管理加算の新設が行われたが、他の要望は採択されなかった。
	精度管理委員会	幸橋 賢一	病理診断の客観性を保ち、信頼あるものとするためには精度管理は欠かせないと考える。現在、免疫組織化学染色のみならず、がんパネル検査における検体管理など、課題は多岐にわたっている。当委員会では、NPO法人日本病理精度保証機構や他学会と連携し、それら課題に取り組んでいく。	NPO法人日本病理精度保証機構と連携して、全国の病理診断施設の精度管理について協力した。また、免疫組織化学染色項目についての実態調査を実施中である。	全国の病理診断実施施設の精度管理を、NPO法人日本病理精度保証機構と連携して実施した。また、免疫染色実施状況の全国調査を行い、問題把握に努めた。他、本データの有用性について、認識を深めた。今後の定期的な全国調査の必要性、また新たな課題に関して引き続き取り組んでいく予定である。
	剖検・病理技術委員会	牛久 哲男	剖検数の減少傾向が続き、専攻医や病理専門医が経験できる症例数が限られてきている。剖検の重要性は変わらないため、一定の剖検診断レベルが維持できるよう引き続き講習会の充実等に努める。	ご遺体取り違え防止策についてとりまとめ、周知を行った。局所解剖の考え方についてとりまとめ、病理専門研修プログラムに周知した。剖検講習会の企画・実施を継続。	剖検講習会の実施。春の総会では内科学会との合同シンポジウムを開催するなど、学会として剖検数低下に向けた取り組みが強化され、今後の継続を期待。
金井	ゲノム病理診断検討委員会	金井 弥栄	がんゲノム医療等に関して厚生労働省が行う施策等に対し、日本病理学会から適切な提言を行う。ゲノム医療の実装に伴い、病理診断学がゲノム情報を取り込みに変革を遂げるべき方向性について議論を深める。国際標準化機構ISOにおける外科病理診断のガイダンス文書策定に対し、日本病理学会から意見を発信する。	厚生労働省がんゲノム医療中核拠点病院等の指定要件に関するワーキンググループに参画し、2024年2月27日厚生労働省健康・生活衛生局長通知「がんゲノム医療中核拠点病院等の整備に関する指針の一部改正」において、分子病理専門医を指す「がん遺伝子パネル検査に関連する病理学に関する専門的な知識及び技能を有する常勤の医師」の配備が要件として記載されたことを確認した。国際標準化機構(ISO)の現況について情報共有した。2024年5月24日にISO15189の技術文書Anatomic pathology guidanceが公開され、日本病理学会の「ゲノム研究用病理組織検体採取規程」(英文版)(Pathol Int 68: 63-90, 2018)が参考文献に採用されている。病理遺伝子検査の見直しについて情報共有し、分子病理専門医の取り組みのあり方を議論した。	厚生労働省がんゲノム医療中核拠点病院等の指定要件に関するワーキンググループに参画している。令和7年7月7日、厚生労働省健康・生活衛生局長が「疾病対策課長通知「エキスパートパネルの実施要件について」が改定されたが、これに際して、「がん遺伝子パネル検査に関連する病理学に関する専門的な知識及び技能を有する常勤の医師(分子病理専門医を指すことを厚労省に確認済み)」については、他の専門家により代替不能であることが明記された。国際標準化機構(ISO)の現況について、情報共有した。ISO/TC212において、分子病理学解析にかかわる文書(第1部DNA編・第2部RNA編)を作成中である。日本病理学会から必要に応じてコメントすることとした。病理遺伝子検査(いわゆる「パロジカルシークエンス」の見直し)について情報共有し、分子病理専門医の取り組みのあり方を議論した。
佐々木	診療関連死調査に関する委員会	羽賀 博典	一般社団法人日本医療安全調査機構の医療事故調査・支援センターの協力学会として、病理解剖を含む個別調査が円滑に進むよう協力する。また診療関連死調査に関する情報について、各支部を通して会員の皆様と共有したい。	各支部を通して、一般社団法人日本医療安全調査機構の医療事故調査・支援センターの協力学会として、病理解剖を含む個別調査に協力した。また同機構とのWeb会議に参加し、診療関連死に関連した病理解剖の必要性の啓発や普及の策について協議を行った。	各支部を通して、一般社団法人日本医療安全調査機構の医療事故調査・支援センターの協力学会として、病理解剖を含む個別調査に協力した。また同機構とのWeb会議に参加し、診療関連死に関連した病理解剖の必要性の啓発や普及の策について協議を行った。第20回医療の質・安全学会学術集会にて「パロジカルシークエンス」(医療事故調査における病理解剖の実施拡大に向けた検討)で発表を行い病理解剖の現状と課題について報告した(2025年11月8日)
	デジタルパソロジー・医療情報委員会	吉澤 明彦	診療報酬上、デジタルパソロジー(遠隔病理解剖を含む)を用いた病理解剖は、「デジタル病理画像を用いた病理解剖のための手引き」(「病理解剖のためのデジタルパソロジーシステム技術基準」)に準拠して行われなければならない。近年、医療情報の管理は厳しくなっており、本委員会ではこの2点の改訂、発表をおこなう。一方デジタルパソロジーは病理医不足を補う技術であるにもかかわらず広がりは限定的であり、様々な観点から解決策を提言する予定である。	デジタル病理に関する二つの手引きを改訂し、2024年4月に発表。本学会や関連学会での広報を行った。周知に関して、病理専門医の認識として重要な部分で専門医試験の一部として出題する提案を理事会にあげた。今後も病理学会にてe-Learningなどのコンテンツを作成し周知を進める予定である。	2024年に改訂された二つの手引きの周知に関して、今後専門医試験に出題できるよう、当該委員会に申し出た。そしてその問題案を作成し提出した。また周知用のE-learningコンテンツ作成に関しては、引き続き継続課題で、専門医試験出題の予定にあわせshort動画を作成していく予定である。
	病理解剖・臨床検査あり方検討委員会	鶴山 竜昭	病理解剖・臨床検査の標準化および新技術導入に関する国内外のさまざまな取り組み、国際規格・ガイダンス・ベストプラクティスの策定に、日本病理学会が積極的に参加、発信できるようにしたいと考えています。	国際標準化機構ISO専門委員会TC212で作成されたISO15189「臨床検査室一品質及び能力に関する要求事項」の改定最終、ISO15189日本語版をもとにJIS(日本産業規格)の策定委員会が組織、鶴山が学会から参加した。本委員会にてJIS策定に関する意見コメントを募集、委員複数名からコメントあり、JIS策定委員会に伝えた。同文書は用語定義追加など一部のISO15189日本語版の修正にとり、2025年度中に公開予定である。	国際標準化機構ISO15189のJIS(日本産業規格)の策定、人工知能の臨床検査室への応用総則、および病理解剖への応用に関する国際規格文書ISO-CD 24051の起草の紹介、委員へのコメント募集およびISO2367: Medical laboratories - Application of risk management to medical laboratoriesの文書の紹介を行った。
	病理解剖資格に関する合同WG	佐々木 毅	活動休止	活動休止	活動休止
田中	広報委員会	笹島ゆう子	(1) 社会への情報発信: 学会HP内一般向けページのブラッシュアップ、SNSの効果的な利用、公開展示やパンフレットの作成・配布などを通じて社会における病理学の認知度向上を目指す (2) 会員向けの情報発信: 各種情報の共有を円滑に行い、会員の利便性を考慮した学会HPの構築を目指す (3) (1)(2)を目的とするHPリニューアルのためのWGを立ち上げる	(1) 社会への情報発信: 学会HP内一般向けページのブラッシュアップやSNSの効果的な利用、公開展示やパンフレットの作成・配布などを通じて活動を継続中 (2) 会員向けの情報発信: 各種情報の共有を円滑に行い、会員の利便性を考慮した学会HPの構築を目指す (3) (1)(2)を目的とするHPリニューアルのためのWGを立ち上げた	(1) 広報活動: 社会への情報発信委員会と協同し、総会時の公開展示、阪神健康メッセへの参加等を通じて病理に関する情報の発信を行った。 (2) 学会HPのリニューアル: HPリニューアルWGを結成し改修準備を進めている。 (3) 学術評議員更新作業: 更新対象者1186名中1151名が更新
	社会への情報発信委員会	伊藤 智雄	市民、学生、初期研修医向けの様々な情報発信を強化する。具体的には病理学会総会など様々な機会を活用した市民展示、各種パンフレットを作成する。新たな情報発信の手段とコンテンツについて検討し、実現に向けて提案・努力する。	2024年9月21日、甲子園球場にて阪神電気鉄道によるHANSHIN健康メッセが行われ、神戸大学とともに病理のブースを出展した。病理に関するミニ講義、8Kによるマクロ観察、液体室実験などにより、多数の親子に情報発信を行った。2025春の総会会場でも同様の企画を執り行う予定である。	仙台春期総会にて市民への展示を無事完了し、好評であった。PRの手法には現在も課題が残る。夏のHANSHIN健康メッセは万博開催の関係で中止となった。今後の展開は不明である。
	病理情報ネットワーク管理運営委員会	宇於崎 宏	テキストファイルと共にバーチャルスライドデータを含む画像が投稿可能な、病理情報ネットワークセンターの安定した運用に引き続き、注力して参ります。	引き続き、病理学会員が無料で使える病理情報ネットワークセンターの安定した運用を行う。	支部会や小グループで病理情報ネットワークセンターを利用してもらった。問い合わせや問題が生じたときの対応を行った。
金井	ホームページリニューアルWG	笹島ゆう子	新設	2024年7月WGリニューアルを目的としてWGが立ち上げられた。WGメンバーには、基幹となる技術面を担当するテクニカルチームの他、コンテンツ担当、他委員会等との連携担当などが含まれる。テクニカルチームを中心に、複数の業者とのオンラインMTG、各社からの見積もりなどを元に検討を重ね、最終的にリニューアルの委嘱先として杏林舎を選定した。改めて出してもらった見積もり書を拡大常任理事会に提出し承認された。今後具体的な作業を進めていく予定。	中間報告後の活動として、委託業者(杏林舎)との契約書の検討に入っている。現在の財産権の範囲が不明確な点が問題となっており、2026年2月のWGミーティングでの検討を経て、契約書の再提出を業者に依頼している。また最終物の買い取り価格についても弁理士等の専門家への確認依頼を行う予定。最終的には再提出された契約書をWGで審議し、弁護士あるいは弁理士の確認を経て契約締結へ繋げる予定。契約書の再提出を待つ間に現HPの問題点の洗い出し作業を行う予定。
	教育委員会	金井 弥栄	治療指針を豊富に提供する病理診断学と、広汎な研究領域にプラットフォームを提供する基礎医学としての病理学の真髄を、学部学生に浸透させるための卒前教育のあり方について、継続的に議論する。病理コア画像の充実にも努める。	医療機関へのアンケート結果をもとに、第113回日本病理学会総会ワークショップにおいて、ポストコロナの卒前教育への提言を行なった。病理コア画像を適正に管理し、不正使用等の案件に対応した。病理コア画像の正常組織像について、新規組織写真を追加して充実を図った。	昨年度の日本病理学会員へのアンケートで、カリキュラム改定において病理学総論・各論が重んじられない場合があるとの危機的な回答があったので、医療機関カリキュラム作成担当者や日本病理学会員に向けて、「卒前教育における病理学教育のあり方に関する見解」をとりまとめ発表した。背景に、①モデル・カリキュラムに病理学に関する十分な記載がない。②医学共用試験(CBT)に病理学に関する適切な出題が少なく、③医師国家試験に良質な病理画像を含む病理学に関する良問が少ないこととあり、④一般社団法人日本医学教育学会モデル・カリキュラム改訂等に関する調査研究チーム「公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構(GATO)」(厚生労働省医政局医事課医師国家試験委員会)「厚生労働省医政局医事課医師国家試験委員会出題基準改定部会」(日本病理学会理事長名で改善の申し入れを行った。厚生労働省医政局医事課長・試験専門官と面談し、医師国家試験出題基準の改定を要する箇所等を具体的に申し入れた。病理コア画像を適正に管理し、新規組織写真を追加して充実を図った。
	病理医・研究医の育成とリクルート委員会	宮崎 龍彦	この度、病理医・研究医の育成とリクルート委員長を豊国伸哉先生から引き継ぐこととなりました。病理専門医取得者数の減少が危惧されている中、非常に重要な仕事を担当すること、身が引き締まる思いです。まずは社会への情報発信委員会や広報委員会とも協力して、学生・若手医師に病理学を知ってもらう、興味を持ってもらう、そして病理医・病理研究者を目指してもらうという三段階を入口として、それに続く若手育成についても若い人たちの希望を聞きながら進めていきたいと思っております。何卒宜しくお願い申し上げます。	2024年6月16日に東京ビッグサイトにてレジナビ東京に出展した。34名の来訪者を迎え、一人30分を超えるような充実した対応を行い、成功裏に終わった。2025年度にも出展予約を行っている。今春の専攻医登録大幅増加に、少しは寄与できたかと思考する。病理学会100周年記念新人賞の募集を行い、今年度は4名の応募を受け入れた。厳正に審査した結果4名で1次選考合格とし、第114回総会二日目に2次選考としてプレゼンテーション審査を行うこととした。3名以内に新人賞を贈呈する。	R6年度、第114回日本病理学会総会において、日本病理学会100周年記念病理学研究新人賞の2次審査を実施し、3名に同賞を授与した。また、6月16日にレジナビフェア2024in東京に日本病理学会として出展し、34名に対応した。新人賞には4名の応募があり、4名全て第115回日本病理学会総会に於いて2次審査を施行、3名に同賞を授与した。令和7年4月の専攻医登録者は前年度の91名から109名に大きく増加し、活動の成果と考えると、R7年度、6月29日にレジナビフェア2025in東京に出展し、32名に対応した。令和7年度研究新人賞には12名もの応募があり、6名を1次審査合格とした。2時審査は第116回日本病理学会総会で行われる。順調に委員会としてのミッションを果たせたと思考する。
海外研修委員会	病理解剖講習会委員会	谷野美智枝	病理解剖講習会は「病理専門医の生涯教育」と「病理専門医を目指す若手病理医の診断力の向上と知識の整理」を目的としています。日本病理学会総会における重要な企画であり、学会参加者に人気の高いプログラムです。これからも、若手からシニアの幅広い病理医の先生たちに興味を持っていただけるような系統的・機器別講演会を開催していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。	谷野(旭川)、南條(秋田)、橋本(福島)、大橋(新潟)、中黒(名古屋)、孝橋(大阪)、森谷(滋賀)、門田(香川)、柳井(岡山)、秋葉(久留米)の10名の新委員で令和7年度の病理解剖講習会の内容に関する審議を行い、講演内容を決定した。学会事務の宮本さんのご協力のもと演者から頂いたテキストを元にハンドアウトの作成やWSIのアップロードの作業を行っている。演者への謝金が他の講演会より低額であったことから同等の金額への再設定を理事会に申請した。	10名の病理解剖講習会委員で2025.2026年度の病理解剖講習会の内容を審議し決定した。2年間の病理解剖講習会の中では、例年通り系統的病理解剖講習会と機器別病理解剖講習会を開催し25名のエキスパートにご協力頂き16テーマを取り上げた。ハンドアウトの配布、オンデマンド配信、WSIと症例解説を学会HPにアップロードした。演者に対する謝金を他の講演会と同等の金額への再設定を理事会に申請し承認された。
	生涯教育委員会	黒瀬 顕	新型コロナウイルス感染の蔓延により中止していたハンガリー-Semmelweis大学の病理解剖研修は、2024年度夏から再開することとなった。Semmelweis大学の担当者はDepartment of Pathology and Forensic MedicineのKiss教授が新たに担当することとなった。既に学会ホームページ上で再開の案内を行っており、程なく正式な募集を開始する予定である。また病理学会期間中に当コース参加者の懇親会を継続して行う予定で、参加後の交流も当コースの意義とした。	Semmelweis大学ではGlasz先生にかわり、Kiss先生(Professor and Director, Department of Pathology and Forensic Medicine)がコースディレクターとなり、2024年度第6回ハンガリー-病理解剖トレーニングコースを開催する運びとなった。5名応募があり(うち1名は病理専門医既取得)全員を受け入れた。2024年3月に名古屋で開催された病理学会総会では豊国伸哉先生のお誘いにより会長招宴にKiss先生を招待し、日本病理学会理事長小田先生ほか理事と懇話会を持つことができた。総会期間中に開催した海外研修委員会にはKiss先生および2024年度の参加者うち4名が参加した。Kiss先生のスライド上映によりSemmelweis大学の病理解剖研修について紹介があり参加者と事前に打ち合わせをすることができた。8月11日から17日に開催された研修では以前にも増してSemmelweis大学側のスタッフおよび指導の充実が図られ、参加者全員が満足して研修を終え、修了証書を授与された。現在、2025年度の開催に向けて研修希望者を募っており、3名の応募を得ている段階である。	ハンガリー-病理解剖トレーニングコースは、Semmelweis大学Kiss教授がディレクターとなり、2024年8月にコロナ禍後再開となった。2024年度は応募者5人のうち1人は病理専門医既取得であったがハンガリーの現状を学びたいという熱意があったためKiss教授の了解を得て5人での研修となった。2025年度は応募者3名であったがKiss教授の理解と病理学会の支援により開催できた。コロナ禍後再開したトレーニングコースは、以前にも増して、指導するSemmelweis大学の病理医や病理解剖技師の数の充実と熱意が感じられ、指導やレポート作成指導が充実していた。また大学の近隣にホテルが新築されたためアクセスが良くなり、研修自体にもプラスの効果があった。今年もともに参加者の満足度は高かった。2025年度は海外研修委員会に最近参加者を複数名加えて充実させた。現在2026年度参加者募集中である。為替レートから参加費を大幅な増額を余儀なくされたが、毎年参加者の高評価を追い風として最低人数の4人の応募を期待している。
	生涯教育委員会	相島 慎一	生涯教育委員会では、会員が生涯にわたって病理学に関する知識を広げ、技能を磨くための継続的な学習制度を確立する。これまで構築している組織診断に関する生涯教育 e-learning、病理解剖講習会および剖検講習会の標準提示を中心として、細胞診断などを含めてより一層コンテンツを充実させ、病理解剖能力の質を担保するような生涯教育サイトを構築していく。	過去に出題された病理専門医試験を基にして、生涯教育委員会の各委員で分担した新たなe-learning問題を80問作成した。その結果、すでにストックされていた180問と併せて、260問の自己学習コンテンツとなった。e-learningがランダムに出題される形式にすること、病理専門医資格更新のための出題数や合格基準について、病理専門医運営委員会(森井委員長)にて検討いただき、生涯教育ページの文言もわかりやすく修正した。	病理専門医試験を基にした新たなe-learning問題を79問作成した。専門医更新後のタイミングで自己学習コンテンツとしてアップしてもらうこととした。専門医更新のタイミングで問題・解説の不備が見つかり、その都度修正を行った。今期令和6/7年度を通じて新たな問題を加えlearningがランダムに出題される形式となった。細胞講習会のコンテンツ化については、担当講師が変わるタイミングで内容をまとめたFAQを活用する方向で、継続検討する。
診断病理サマージョイント委員会	矢持 淑子	新設	胃癌に関する教育助成プログラムに採択されたため、日本における胃癌の病理解剖の均てん化を目指すべく、教育セミナーを企画するサブワーキングを立ち上げ、2025/3/21にハイブリッド開催、さらにその後一か月間のオンデマンド配信を予定している。	胃癌に関する教育助成プログラムに採択されたため、日本における胃癌の病理解剖の均てん化を目指すべく、教育セミナーを企画するサブワーキングを立ち上げ、2025/3/21にハイブリッド開催、さらにその後一か月間のオンデマンド配信を予定している。	胃癌に関する教育助成プログラムに採択されたため、日本における胃癌の病理解剖の均てん化を目指すべく、教育セミナーを企画するサブワーキングを立ち上げ、2025/3/21にハイブリッド開催、さらにその後一か月間のオンデマンド配信を予定している。
金井	診断病理サマージョイント委員会	矢持 淑子	診断病理サマージョイントは、「病理と臨床の対話」という副題にもあるように、病理医だけではなく各科臨床医や放射線科医との対話を通じ、多岐から病理解剖を系統的に考えられる、独自性のある講習会となっています。今年で18回目となり、テーマとなる臓器も2クール目に入っています。今後のテーマの検討、そして円滑な運営や開催を目指していきます。	令和6年度の第18回診断病理サマージョイント(テーマ:「骨軟部腫瘍」)は、現地対面及びWEBのハイブリッド開催+オンデマンド開催形式により、700名を超える参加者があり、非常に盛況であった。今年度第19回(テーマ:「乳腺」)もハイブリッド開催+オンデマンド開催を行う予定である。また今後扱うテーマについても引き続き検討していく。	令和6/7年度の診断病理サマージョイントはハイブリッド形式での開催が安定して行われ、現地及びWEBを含めた参加者が年々増加し、令和7年度は800名を超える多数の参加者があった。ハイブリッド形式開催の必要性及びこのような病理医と臨床医が合同で疾患の診断や治療について考える講習会への重要性が示された。委員会としては次年度以降のテーマの選定及び世話人の決定、早めの会員への周知を含む、診断病理サマージョイントの円滑な運営についての検討を行った。
	ゲノム病理標準化講習会委員会	金井 弥栄	ゲノム研究用病理組織検体採取規程の内容、組織バンクングの実際、ゲノム研究の具体的な成果について解説する「ゲノム病理標準化講習会」を開催することで、分子病理専門医が研究基盤整備に貢献することの意義を周知する。ゲノム研究における病理学(病理医)の役割を周知するべく、日本病理学会外への発信にも努める。	第13回ゲノム病理標準化講習会を、2024年7月にオンデマンドで開講した。研究基盤整備における病理学の立ち位置をまず述べ、研究用規程を解説し、一線の病院で研究用規程をどのように遵守して組織の採取・保管を行うか、研究用規程を遵守するどのようなバイオバンクが構築できるか、バイオバンク試料(研究用病理組織検体)を用いてどのような研究成果が挙げられるかを発信した。バイオバンク関連学会や国立病院機構に呼びかけられることにより、日本病理学会外からの出席を含む最多の受講者を得て、受講者アンケートで本講習会が研究促進に貢献できた事例も確認できた。	第14回ゲノム病理標準化講習会を、2025年7月にオンデマンドで開講した。研究基盤整備における病理学の立ち位置をまず述べ、研究用規程を解説し、一線の病院で研究用規程をどのように遵守して組織の採取・保管を行うか、研究用規程を遵守するどのようなバイオバンクが構築できるか、バイオバンク試料(研究用病理組織検体)を用いてどのような研究成果が挙げられるかを講義した。改訂した研究用規程2版をテキストとして、用い、日本臨床衛生検査技師会との共催で開催している。日本製薬工業協会や、分子病理学研究会を輩出する可能性のある教育機関にも受講を呼びかけ、日本病理学会外からも多数の出席者を得ており、研究促進における病理学の役割を発信できたと考えられる。

常任理事 会担当者	委員会名	委員長	令和6/7年度抱負と課題 (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	中間報告(令和6年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)	活動総括(令和7年度末) (字数制限はありませんが50-200文字程度を目安にご記入ください)
大橋	北海道支部	榎田 京子	第1期目となる。これまでに実施したWEB併用形式も活用し、セミナーを企画・開催する計画である。また6月には合宿・対面形式で、病理夏の学校を開催する予定である。支部会の発展と若手病理医の育成に尽力したい。	令和6年度は学術集会(標本交代会)を4回、10月には北海道医学大会病理分科会を開催した。また、5回の共催セミナーも開催した。臨床病理、研究ともに会員の活発な学術交流が行われた。また、病理夏の学校は6月に1泊2日の合宿形式で行われ、50名程度の学生の参加があった。特別講演に加え、キャリアパスについての若手病理医からの発表、病理標本交代会など多彩なプログラムにより、学生からは大好評であった。	令和7年度は学術集会(標本交代会)を4回、10月には北海道医学大会病理分科会を開催した。また、5回の共催セミナーも開催した。臨床病理、研究ともに会員の活発な学術交流が行われた。また、病理夏の学校は9月に1泊2日の合宿形式で行われ、51名(学生26名)の参加があった。特別講演に加え、キャリアパスについての若手病理医からの発表、病理標本交代会など多彩なプログラムにより、学生からは大好評であった。
	東北支部	大森 泰文	会員間の意見交換の活性化と若手の活躍への支援に注力する所存である。また、今年度より定例の支部集会所を1回増やし、12月に研究成果を演題としてオンライン形式で開催することになった。これが軌道に乗るように鋭意努力したい。	7月13・14日に支部総会および学術集会を福島市にて対面で開催し、100余名の参加者を得て交流および情報交換を行った。12月7日には初めての試みとして、研究に特化した内容での学術集会をオンラインで開催し、70余名の参加者を得て各研究室の研究活動を学び情報交換をした。2月15・16日は支部総会および学術集会を仙台市にて対面で開催し、約120名の参加者を得た。特に若手の発表の増加が顕著であり、活発な議論が展開された。現在、8月23日に開催予定の夏の学校(弘前市)に向けて鋭意準備中である。	2024年度と2025年度は、各年度3回(計6回)の学術集会を開催した。3回のうち2回は症例を中心とした集会で、各回2日間の開催とし、一般演題の他に教育講演や特別講演が行われた。1日目の夕方には懇親会も催された。また、残りの1回は研究を中心とした集会で、1日目のオンライン開催とした。ここでも一般演題の他に、特別講演やミニレクチャーが行われた。いずれの集会も各回100人程度の参加者を得た。病理夏の学校は、隔年開催となっており、2025年度は8月に弘前(水上浩哉実行委員長)にてハイブリッド開催となった。学部学生と研修医が30名参加した。
	関東支部	笹島 ゆう子	年4回の学術集会(第102回:5月25日獨協医大、第103回:10月19日筑波大、第104回:12月7日東邦大、第105回:3月頃、世話人未定)およびサマーセミナー(8月17日日大)を予定しています。基本的には対面とオンラインのハイブリッド開催とし、多くの会員が自由な形で参加できる会を目指します。サマーセミナーは対面・懇親会付きで開催し、医学生や初期研修医へのアピールを強めます。	定期学術集会(第102回:5月25日獨協医大、第103回:10月19日筑波大、第104回:12月7日東邦大)およびサマーセミナー(8月17日日大)が滞りなく開催された。今年度最後の学術集会は第105回(3月8日杏林大)を予定。いずれも対面とオンラインのハイブリッド開催であり、多くの会員が自由な形で参加できる会となった。サマーセミナーは対面・懇親会付きで開催され、医学生や初期研修医への積極的なアピールの場となった。	中間報告以降の定期学術集会として、第105回(2025年3月杏林大)、第106回(2025年6月自治医大さいたま医療センター)、第107回(2025年9月東京歯科大)、第108回(2025年12月慈恵医大)が滞りなく開催された。いずれもハイブリッド形式での開催で、オンライン参加が定着した。現在第109回(2026年3月21日開催予定、東京女子医大)の準備中である。サマーセミナーは2025年9月順天堂大学において他の基礎医学関連セミナーとの共同開催の形で対象を中高生まで広げて開催した。多数の中高生、医学生、研修医が参加し盛況となった。
	中部支部	宮崎 龍彦	村田哲也先生の後任として、日本病理学会中部支部を担当することになりました。中部支部は、支部交代会・スライドセミナーの他、東海病理医会(ワカウ会)や北陸病理集談会など、暖かい雰囲気での診断病理をともに学ぶ場を多くもち、会員相互の風通しもよい、素晴らしい空気を持っています。これを絶やさないよう支部長として頑張っていきたいと思っております。よろしくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。	2024年7月に第92回中部支部交代会を富山で、2024年12月に第93回中部支部交代会を対面開催し、それぞれ88名、133名の参加を得た。また、2025年3月に第28回中部支部スライドセミナーを対面開催し、盛会となった。また、2024年8月31日に第15回中部支部病理夏の学校をWeb開催ながら5年ぶりに実施し、52名の参加を得た。さらに、月1回の東海病理医会(ワカウ会)による診断精度向上・若手育成事業も安定して進んでいる。	中部支部では、R6年度には、7月20日に第92回交代会(富山、世話人:平林健一)、12月21日に第93回交代会(豊明、世話人:南口早智子、加藤省一)、第29回スライドセミナー(名古屋、世話人:加留部謙之輔)、これらに於いて、学術奨励賞、学術奨励優秀発表賞を計7名に授与した。また、8月31日に第15回病理夏の学校(Web開催、世話人:宮崎龍彦)を行い、52名の参加を得た。R7年度には7月19日に第94回交代会(福井、世話人:大越忠和)、12月20日に第95回交代会(名古屋、世話人:西村理恵子)、3月14日に第29回スライドセミナー(名古屋、世話人:岩崎靖)を行い、これらに於いて学術奨励賞、学術奨励優秀発表賞を計6名に授与した。2月7日に第16回病理冬の学校(Web開催 世話人:宮崎龍彦)を行い、43名の参加を得た。
	近畿支部	羽賀 博典	学術集会の一部で、参加者の利便性を考慮して、Webでの開催を復活させる予定である。逆に、昨年までWebで開催していた「病理夏の学校」は、令和6年度から対面開催の再開を予定している。症例検討の内容が高度化し、気軽に演題が出しにくいという声もあり、昨年度から気軽に演題を出せるセッションを設けたが、その活用が今後の課題である。	年4回の近畿支部学術集会のうち2回をオンライン開催、2回を対面開催で実施した。今後対面開催を増やすに当たり、学術集会の参加費の値上げを検討している。夏の学校は、1日で対面開催で実施した。今後も対面開催継続の予定である。ホームページをリニューアルした。症例検討の演題数が減少傾向にあるため、学術委員会では演題数増加に向けて協議を行った。来年度からは、研修医、専攻医から、ベテラン病理医までの、幅広い年代に向けての応募を予定している。	年4回の近畿支部学術集会を3回を対面、1回をオンラインで開催した。オンライン開催では、始めて海外の講師を招聘して開催した。学部学生・研修医向けの夏期病理セミナー「夏の学校」を関西医科大学にて実施した。運営経費の増加に対応するため、学術集会の参加費の値上げを実施した(1,000円→1,500円)。
	中国・四国支部	増本 純也	中国・四国支部会員の知識を更新し、日々の診断業務に役立つ教育セミナーを充実させ、学術総会では学術交流を推進し、会員相互の共同研究の機会を提供したいと思っております。夏の学校では学生や初期研修医にリサーチマインドに溢れた病理学の魅力とそれらが具現化された刺激的な病理診断の魅力を伝えたいと思っております。	学術交流と会員のリサーチマインドの涵養のため、支部総会1回を含む支部学術集会(スライドカンファレンス)を3回開催(第144回高知大学:世話人 戸井慎先生、村上 一郎先生 2024年6月22日(WEBのみ)、第145回岡山大学:世話人山元英崇先生 2024年10月5日(WEB+対面)、第146回鳥取大学:世話人桑本聡史先生 2025年2月10日(WEBのみ)した。若手病理医の育成と相互交流のため、第145回開催時には病理専門医更新1回までの若手による「若手の会」が復活し(担当:業務委員長福山医療センター表梨華先生)、50人以上の対面参加が実現した。初期研修医にリサーチマインドに溢れた病理学の魅力とそれらが具現化された刺激的な病理診断の魅力を伝えるため、病理夏の学校を開催した(広島大学:世話人有廣光司先生)。支部会員の日常診療の役に立つ教育講演を1回開催した(世話人業務委員長福山医療センター表梨華先生)。いずれも当初の目的に沿って行うことができた。開催に当たり多大なご尽力を頂いた先生方にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。	学術交流と会員のリサーチマインドの涵養のため、支部総会1回を含む支部学術集会(スライドカンファレンス)を3回開催した。若手病理医の育成と相互交流のための「Shin若手の会」が復活し、その後毎回開催が実現した。初期研修医にリサーチマインドに溢れた病理学の魅力とそれらが具現化された刺激的な病理診断の魅力を伝えるため、病理夏の学校はコロナ禍が明けて初めて1泊2日の合宿形式が復活した(香川大学:世話人上野正樹先生)。支部会員の日常診療の役に立つ教育講演を年1回開催した(世話人業務委員長福山医療センター表梨華先生)。開催に当たり多大なご尽力を頂いた先生方にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。
九州・沖縄支部	久岡 正典	当支部定例の活動である「九州・沖縄スライドカンファレンス」を年6回、対面あるいはWEBで開催する。また、それに付随して学術講演・教育セミナーを年2回計画すると共に、第400回の記念となる会では特別な催しを企画する。恒例の夏の病理学校を開催し、病理医のリクルートに引き続き尽力する。	例年と同様に年6回のスライドカンファレンス(対面3回、WEB3回)を開催し、学術講演2回、企業協賛セミナー2回を合わせて実施した。その中で第400回記念となる会(熊本)では特別企画としての学術講演や最多演題出題者等の表彰式を学術した。10月には九州大学にて「第12回秋の病理学校」をハイブリッド開催し医学部学生等約100名が参加した。	支部定例の活動である「九州・沖縄スライドカンファレンス」を年6回、対面またはWEBで開催した。それに合わせて学術講演・教育セミナーを年2回実施すると共に、第400回記念のスライドカンファレンス(熊本)では特別な催し(講演会等)も企画した。また、秋の病理学校を大学持ち回りで開催し、病理医のリクルートや啓蒙活動などを行った。	
小田	監事	伊藤 浩史	私は昭和61年に宮崎医科大学(現宮崎大学医学部)を卒業後、一貫して病理学研究、教育、臨床に携わって参りました。定年退官まであと2年となり、お世話になった病理学会への最後のご奉公として、理事会業務や財務状況の把握等、病理学会会員の皆様への代わりとなって監視役を果たしたいと思っております。何卒よろしくお願い致します。	あつという間の一年間でした。理事会議事録を監査の上、押印するのが仕事とはいえ、理事の皆様への膨大な業務と学会への献身的な貢献に驚かされました。残り任期もあと一年となりましたが、会員の皆様、理事会の皆様への業務の少しでもお手伝いができればと思います。本年度もよろしく願っています。	3月末で山口大学を定年退官となります。この2年間、監事としては、もっぱら理事会議事録に押印するだけで、お世話になった日本病理学会への最後のご奉公となったかどうか疑問ですが、理事の皆様への膨大な業務と学会への献身的な貢献を目の当たりにし、会員を代表して、改めて感謝の意を表したいと思います。日本病理学会の今後の益々の発展を祈念して、退任のご挨拶とさせていただきます。
	監事	九嶋 亮治	一般社団法人における監事には「理事の職務執行の監査を行い、監査報告を作成する」「理事が作成した会計書類、事業報告等を監査する」役割がございます。長らくお世話になった病理学会への恩返しのためしっかりと努めたいと思っております。	理事会の円滑な運営に今後とも協力させていただきます。	理事会に全出席「理事が作成する会計書類と事業計画・報告を監査する」という一般社団法人にとって重要な役割と貴重な体験を現役最後の2年間務めさせていただきました。ありがとうございました。